



自由に選択できる幅の極めて狭かった高校までの教育と比較して自分で興味を持った科目の選択が可能であるということは新入生にとって大きな喜びであり、大学らしさを感じるのではないのでしょうか。最近の学生をみると、自分の興味を持ったこと以外には関心を示さない傾向が強いので、自分の意思に反してやむなく選択した、あるいは強制的に受けさせられているという感覚からは学ぶ意欲は出てこなくて進んでやる気にならないのは当然の帰結であります。興味を持って選択した場合には、自分の意思で授業に参加しているという意識による取り組みの積極性や面白いと感じる感覚、それに自分で選んだ以上やり遂げる自覚というか責任を感じるといった気分が無意識のうちにあるのではないかと思います。その結果として、理解度が高まるとともに関心が深まり、得るところも大きくなるといった効果が出てくるものと考えられます。この効果は教員が考えている以上に大きいのではないのでしょうか。授業編成に当たって考慮すべき重要なポイントの一つであります。

次はマスプロといわれている大人数を相手にした教育の問題であります。大人数の教室では講義の内容がよほど面白ければ別ですが、一般的には出席する気にもならないというのが学生の気分ではないかと思います。事実、授業の途中放棄学生の割合が高いのは大人数の講義であります。平成7年度第1学期の授業科目について調べてみたところ、全体を平均すると途中放棄者は14.4%ですが、聴講者数の増加と共に高くなり、300人以上8クラスの平均は約21%に達します。大人数にして科目数を減少させると、選択の幅が狭まる結果として不本意聴講が多くなり、上述の積極的参加あるいは学習意欲の低下と相まって教育効果があがらないこととなります。その結果、履修しても何も得られなかった学生の比率が増加してくるにつながっていると考えられます。勿論、ここに挙げた以外の要因もあると思いますが、考えるべき重要な要素であります。

学生へのアンケート調査の柱の一つとして授業の難易度を取り上げました。これは発達段階に応じた適切な教育があるという観点から出されている事柄で、分かり易いことと内容の質・授業のレベルとは相関していません。高度の内容を如何に理解しやすく講義するかが工夫のしどころであります。ただし、ただ聞きっぱなしで理解できる訳はないので、自分で学習をするように仕向ける働きかけが必要であります。このような双方向の営みによって教育効果が上がるものと期待されます。

本研究年報第2号には多くの先生方から大学教育に関して貴重なレポートの投稿をいただきました。授業での様々な工夫や教材開発などの実践報告、授業のあり方をめぐる論説、外国語教育についての調査や改善の取り組み等の報告、授業改善のためのアンケート調査の報告など大学教育に関する研究調査も緒についたばかりではありますが、着実に前進していると感じております。今後、ファカルティ・ディベロップメントを推進する中心として本大学教育開発研究センターが果たす役割はますます大きなものがあると考えておりますので、大学教育の改善について忌憚のないご意見と積極的な取り組み・ご協力をお寄せ下さることをお願いすると同時に、本年報が大学教育改善のための資料として役立つことを念願しております。